保育者養成校の学びは
保育実践にどのように繋がっているのか

―初任保育者における「実習関連科目」の学びから―

松　延　　毅

要　旨

本研究では、保育者養成校における「実習関連科目」での学びが、初任保育者における現在の保育実践にどのように関連しているのかについて、保育者の語りを基に明らかにすることを目的とした。具体的には初任保育者に対して保育者養成校での「実習関連科目」に関する学びについてインタビューを実施し、得られた言語データを、SCAT を用いて分析を行った。その結果、初任保育者は「実習関連科目」での学びを現在の保育実践に肯定的に活用していることが示唆された

キーワード：SCAT、半構造化インタビュー、初任保育者、保育実習、教育実習

1　問題と目的

（1）「保育者になる」ということ

「保育者になる」ということはどういうことなのだろうか。この問いについて津守（1997）は「子どもをあるがままに認めるという、子どもとの関係の原点に日々立ち戻ることである」と述べ、大人の作り上げた規準に固執するのではなく、個々の子どもに対して自分自身を変化させながら関わっていくことの可能性を示している。すなわち関係性に縛られずに子どもに対峙する一人の人間として関わり、その中で自らを変化、成長させていくことが保育者という存在に求められるといえる。秋田（2007）は保育者の専門性の一つとして、「『観る』ことで子どもや保育が見えてくることが保育者の専門性であり保育の始まりだといえる」とし、保育の場における観察の重要性を挙げている。さらに「子どもの状況や発達の課題をわかり援助することを意図して具体的に行動に移す『実践化』の過程」の重要性も示し、思索や体験は保育者自らの専門性の獲得に寄与するとしている。保育者になるということは、保育者自らの能動的な姿勢と体験を伴った学びや研鑽の上に成り立つものといえよう。

また秋田は保育者に求められているものについて、①「人的環境としての保育者」②「子育て支援の専門家」②「自己を振り返り自ら学ぶこと」の三点を挙げている。自らも子どもたちの育ちの環境要因となりながら、その子どもを取り巻く家庭や社会に対する支援の専門家ともなり、その上で自らの資質能力を高めて続けていくことは日々の不断の学びだけでなく、保育者養成校における学びの内容や質、学生自らの取り組みも重要だといえる。

（2）保育実習・教育実習の意義

そのうえで保育者を志す学生が実際の保育を体験する保育実習や教育実習の意義は小さくない。これらの実習は保育士資格や幼稚園教諭免許状を取得するために必要な必修科目として位置づけられる。また保育者成校での基礎教養科目や専門領域の学びと並行しながら、段階的に保育実習や教育実習において学びを深めることは、言わば「机上の空論」を避け、理論と実践を結び付けることになり、学生に対してより構造的な学びを保障するものである。

保育の場で学ぶということについて秋田（2007）は保育者の社会的な責任を感じたり、社会人としての資質や態度を身に付けたりする「人間教育」の場であるとしている。子どもとの関係や園の職員、子どもの保護者や地域の人々との関係など、人と人とのかかわり方を学ぶことができる。そのうえで子どもに対する保育者としての行動、職員間の連携や分担、保護者への対応などを学ぶ。先に述べた保育者養成校での学習との繋がりだけでなく、社会人として専門職に携わる者としての自覚や責任についても学ぶことに繋がっているのである。

（3）保育者養成校と保育現場のつながり

そのような保育者養成校での学びを実践的に深め、社会人としての資質を磨くことにも関連する保育実習は、保育者養成校と保育現場の間においてどのような意味をもつのであろうか。秋田は（2007）は保育者養成校での教育と養成校終了後の保育現場における現職教育をつなぐ存在として保育実習生を捉えている。平成29年告示の保育所保育指針(2017)では、保育者自らの資質能力について、「その職責を遂行するための専門性の向上に絶えず努めなければならない」と示しており、保育者が保育現場においても学び続けていくことの重要性と必要性について明記されている。保育実習生の実習態度や取り組みは保育現場にいる現職保育者にとっても、人的環境要因となり、その姿から自らの日頃の保育実践を顧みたり初心を思い返したりしながら、新たな研鑽を積むことに寄与する。

岡本（2007）は保育実習生を指導する保育現場から保育者養成校に寄せられる指導上の要望について、各園で共通しているものと、実習受け入れ園の指導の考え方によって異なるものとがあるとし、保育者養成校においては、それらを検証したうえで保育現場との連

携を図っていく必要性に触れている。また山田ら（2016）は保育者養成校と現職保育者の連携について、「保育学生の育成への協働も重要で緊急な課題でもあろう」と述べ、両者のより緊密な連携の必要性を示している。

これらのことから保育者養成校での実習関連科目がその後の保育者としての資質能力に具体的にどのように繋がっているのかを知ることは両者の連携の課題を解決する一つの視座となるのではないかと考える。

（4）初任保育者が自らの実習を振り返る意義

現職の保育者が、自らの保育実践を振り返ることの重要性についてはD・A・ショーンの提唱した「反省的実践家」という言葉によって示されている通りである。その反省的実践の中で養われるいわゆる「行為の中の知」は直感的な行為に起因するとしている。実践経験の少ない初任保育者においては、その行為の中の知の積み重ねが、経験年数の多い保育者と比較すると少ないことがうかがえる。すなわち初任保育者の保育行為においては保育実習を含む「実習関連科目」による知識また経験的な学びが背景になっていると考えられる。自らの実習などを振り返ることで、日々の保育実践や保育行為について理解を深め、改めて捉えなおすことができると考えられる。

（5）本研究の目的

実習関連科目に関する先行研究においては、実習評価に関する研究や実習指導などに関する研究は概観されるが、初任保育者と「実習関連科目」の関連性に関する研究は見られない。そこで本研究では、保育者養成校における「実習関連科目」での学びが、初任保育者における現在の保育実践にどのように関連しているのかについて、保育者の語りを基に明らかにする。

2　研究方法

（1）「実習関連科目」の定義

本研究においては、初任保育者が保育者養成校で経験した実践的な学びが、現在の保育実践にどのように関連づいているか明らかにする。保育者養成校において、保育士資格と幼稚園教員免許を取得可能な場合、各資格によって定められた教育課程を納めなければならない。保育士資格においては、一般的に「保育実習１」「保育実習２」などと呼ばれる科目に加えて、それらの「実習事前指導」や「実習事後指導」などが必修科目となる。教育実習においても同様である。その他に一般的に「施設実習」と呼ばれる実習なども必修とされる。

本研究においては、それら科目を包括して「実習関連科目」と定義し、初任保育者の自

らの経験や学びなどを捉える視点とした。

（2）インタビューと分析方法の選定について

本研究では、初任保育者が保育者養成校において「実習関連科目」が自らの現在の保育実践のなかでどのような影響を与えているのかを検証するため、研究協力者に対して、Table1 に示した項目について質問項目を基にした半構造化インタビューを実施する。

インタビューによって得た言語データは、大谷（2008）が開発した SCAT(Steps for Coding Theorization) によって分析する。SCAT は、比較的小さなデータからも、構成概念を 4 つのステップによって明示的に抽出することが可能で、言語データのメタな意味まで読み取り、構成概念を紡ぎだしてストーリー・ライン注 1 を記述し，そこから理論的記述を得ることができる分析方法である。上田 (2013) も、言語データから象徴的な概念を抽出する方法として SCAT が有効であることを示している。そこで、SCAT を用いて、現在の保育実践において、保育者自身が保育者養成校で経験した「実習関連科目」での学びがどのように関連しているのかについてより細やかに明らかにしようと考えた。

研究協力者は、保育士資格や幼稚園教諭免許を取得可能な保育者養成課程をもつ二年制の保育者養成校を卒業して、平成 29 年 4 月より、新潟県内の A 保育園に勤務する初任保育者 2 名に協力を得た。インタビューは平成 29 年の 11 月に実施した。

Table 1　インタビュー質問項目

（1）「保育実習」振り返って、現在の自らの保育実践についてどう感じているか
（2）「実習事前指導」「実習事後指導」を振り返って、現在の保育実践についてどう感じているか
（3）「保育実習」を得て、自らの社会人としての資質につながることはあるか

3　結果と考察

初任保育者が「保育実習」を経験した中での学びや、現在の保育実践への関連について半構造化インタビューを実施し SCAT を用いて分析した。以下、SCAT の分析結果から得られたストーリー・ラインを示し、理論的記述を考察として示す。

【ストーリー・ライン】

初任保育者は、保育者養成校での保育実習を実践的学習の場として捉えている。その中では、指導教員である保育者の保育を観察したり、子どもたちとかかわったりすることで、学習的試行を行い、個と集団での援助のバランスなど対象への援助行為や、諸処の保育者

の保育行為を学んでいる。最高学年の子どもなど特定の年齢の子どもの姿からは発達過程に則った成長を学ぶ機会となる。同時に養成校の授業では経験できない、対処困難経験に出会うこともある。個を受け止めた共感的援助が求められる自己主張への保育行為は極めて実践的経験であり、学習素材の限定性がある保育者養成校での授業では経験できない学びである。保育に必要な子ども理解についても、漠然とした理解に対して子ども理解に必要な視点を学ぶ。初任保育者はそのような子ども理解への指導などの実践的学習時の指導内容への部分的納得を積み重ね、様々な実践的学習の場を経験することで、保育者としての援助の基本的方略を学んでいる。

その中で、肯定的な自己への評価経験を得ることは、その評価への自己肯定意識の高まりに繋がり、現在の保育者の意識に根付いていくものである。また保育者としての資質の観点においては実践的保育行為への意識を多くもって実習に臨んでいるようであるが、人生経験によって獲得されると必要に応じて経験し獲得されるもの、すなわち慣習的学習と意識的経験によって身についていくものがあるとし、とりわけ後者においては実践的学習の効果であると捉えている。一方で実習開始直後の不確かな子ども理解や乳児クラスの経験の少なさなど実習経験クラスの偏りなどによって、現在の保育実践において偏りへの回顧的評価から未経験の保育行為に対する不透明さや少ない経験値による不安感を抱いている。また学習課程に位置づけられる内容においてはその保育行為や道具の活用も含め、活かされない学びも存在している。また具体化されない自分の存在や保育形態に戸惑う実習生の姿が浮き彫りになり、保育の意義への疑問から実習内容を無意味な時間の浪費と捉え、現在の職場に活かせる有意義な学びへの願望をもっている。そこには実習で経験した場と現在の実践の場の保育環境の違いによって学習内容の非継続性が働いている。

初任保育者は、日々の保育実践において、子どもの主体性のある保育計画や流れていく保育について、実践的学習の回顧を行いながら、かつ経験的実証による理解に基づいて保育者自身の保育の独自性を踏まえながら取り組んでいる。そこでは個々の異なる子どもの姿に出会い、予期しない展開の実践的学びが実践知として蓄積されている。しかし、実際の保育場面においては経験の有無や実践知の少なさから、効果的援助行為が伴わずに悩む姿もある。

実践的学習の集大成として一日を通して保育を行うことは、現在の保育実践において、保育対象の非限定性をもち、子どもの注目的行為や継続的な発話行為を受け止めながら、子どもたちが日常会話から生まれる安心感をもって過ごしてほしいという無条件の奉仕的感情や自身の保育行為の根源的気づきを得て、自身の保育観の確信に寄与している。同時に実践的学習の必要性への確信となっている。一方で保育実習については課題感的意識もあり、それゆえに課題感による保育行為へ懐疑的感覚や達成義務感へのつまらなさも感じている。

初任保育者となった現在は、課題感の脱却が起こり、実践的立場への自発意識や、実践的学習と社会的責任のやりがい対比の中で、現在進行形のやりがいを感じている。そこには短期間の実習では経験できない、成長し続ける子どもとの出会いや、その成長への保育者自身の好意的感情の経験、あるいは子どもの成長の可能性を感じられることが背景となっている。

【理論的記述】

・初任保育者は、保育実習を実践的学習の場と捉え、養成校での授業科目だけでは学ぶことが出来ない実際の子どもとの関わりや保育者としての様々な保育行為を、経験を通して学んでいる。
・保育者養成校での学びにおいては学習教材が限定的である一方、実践的学習は多様性に富んでいる。その中で指導を受ける内容についても多岐にわたるため、実習生はその指導に対して一度に完全に理解し納得するのではなく、部分的納得を繰り返していく中で、指導内容を理解し、自らの保育者としての援助の基本的方略を学んでいる。
・自分自身に対しての肯定的な評価の経験は、自己意識を高めることにつながるだけでなく、初任保育者になった後も根付いていくものである。
・また実習事前指導や実習中に必要性に基づいて経験する内容については、保育者や社会人としての資質を磨く機会となっており、実践的学習の効果と言える。
・実習経験クラスの偏りなどによって、現在の保育実践において未経験の保育行為に対する不安感を抱いている。
・実習での学びに対して消極的あるいは否定的に捉えている部分もあり、実習に対してより有意義な学びへの願望をもっている。それらの背景には実習で経験した場と現在の実践の場の保育環境の違いによって生じている学習内容の非継続性や非活用性が働いている。
・初任保育者は、日々の保育実践において実習での学びを振り返りながら、そこでの経験や学びに基づいて、積み重ねてきた実践知を生かして自分自身の保育実践を行っている。
・責任実習で一日を通して保育を行うことは、すべての子どもたちに対してのかかわりへの思いなど自分自身の保育観の確信に寄与している。同時に実践的な学びの場としての保育実習の必要性を感じている。
・保育実習について実習中は課題感的意識もあり、達成義務感をもっている。一方、初任保育者となった現在は、成長していく子どもたちへの喜びと共に保育者としての主体的な思いの中でやりがいを感じながら、保育を創造している。

４　総合考察

初任保育者にとって「実習関連科目」における学びは自身の保育実践において、子どもたちへの関わりや援助行為の基礎的知識や技能となって保育者の専門性の素地を形成していることが示唆された。日々の保育の実践では、子どもたちの姿をはじめ、実習などでの実践的学習の場において経験する状況と全く同じ状況が起こることはない。それゆえに実習生として保育現場に身を置くことは、実際の子どもたちの姿と共にそれに対する保育者の姿を一般化しながら捉えていると考えられる。津守（1997）は、人の行為の捉えかたについて、「個人的意味」と「普遍的意味」の概念を示している。ある特定の個人の行為を、他者にも起こりうる行為と考えてその意味を考えるというものであり、その際に、その行為は特定の個人のものから他者のものへと広げられ普遍的な意味を有する。実習生においては、実習などの実践的な学びの場面においては、ある特定の場面における保育行為を「普遍的意味」を持たせて捉え学んでいることが考えられ、それが現在の保育実践においても活きた学びとして関連付けられていると考えられる。

初任保育者が実習生の立場における学びのプロセスにおいて、実際に経験した特定の場面から「普遍的意味」への解釈プロセスを積み重ねることは、幅広い保育行為への実践知の獲得に繋がると考えられ、保育者としての資質、能力の成長に寄与するものであると考えられる。一方で実習などの実践的学習の場において経験していないことについては、普遍的意味としての実践知の獲得が希薄になることから、現在の保育実践においても不安要素となっていることが考えられる。これらのことから実践的学習においては、様々な年齢の子どもたちの姿について学ぶ機会を持つことと同時に、それぞれの年齢の子どもたちについて一定の時間的猶予をもってかかわることが、その後の幅広い実践知の獲得に繋がると考えられる。

「実習関連科目」での学びの中で、自分を認められる経験が、その後の保育実践においても保育者自身の自信になっていることは、保育者としての自己肯定感を育み、日々の保育実践において意欲的に取り組むことに繋がっていると考えられる。相良ら（2017）は学生の教育実習の効果的な指導の在り方の研究の中で、実習生の自己肯定感と自己評価の関連について、自己肯定感が高い実習生ほど、実習の諸側面においてうまくできたと考えていることが示している。すなわち、実習などの実践的学習の期間中に高められた自己肯定感は、実践的学習そのものを肯定的にとらえることにつながり、そのような実感をもって初任保育者になるものは、日々の保育実践においても「実習関連科目」による学びを肯定的に捉えて活かしていくことに繋がると考えられる。実習期間や保育者養成校においては指導者側も実習生の自己肯定感への意識への働きかけをもって指導に当たることで、その後の保育者としての自覚や意識を高めることに寄与していくことが伺える。

5　課題と展望

今回の研究では、初任保育者が保育者養成校での「実習関連科目」での学びと現在の保育実践の関連を捉えた。その中で「実習関連科目」が現在の保育実践に肯定的に関連していることが示された一方で、実習生自身の「課題感意識」によって効果的な学びの関連がなされていなかったり、保育環境の差異から学びが非継続になったりしている部分も明らかになった。「課題感意識」についてはそれぞれの「実習関連科目」の内容や実践的学習を行う環境についても焦点を当てていく必要性がある。また保育実践の多様性と「実習関連科目」での学習内容の限定性との関係についても細やかに分析する必要があり、今後の研究課題としたい。また本研究の展望としては、初任保育者だけではなく経験年数に応じて現在の保育実践と「実習関連科目」との関連について明らかにしていくこととしたい。

（注 1）大谷 (2008) が考案した SCAT では、言語データを 4 つのステップを踏んで、構成概念を抽出する。この抽出された構成概念を組み合わせて、「データに記述されている出来事に潜在する意味や意義を」書き表した文章をストーリー・ラインという。

文　献

津守　真（1997）保育者の地平 —— 私的体験から普遍に向けて　ミネルヴァ書房
秋田喜代美編（2007）今に生きる保育者論　株式会社みらい
岡本和子（2007）保育士養成における保育実習の抜本的検討（１）—養成校と実習施設との連携を問う—　岡山県立大学短期大学部研究紀要　第 14 巻　49-62
山田朋子　森美保子（2016）保育の質向上に繋がる養成校と保育者との協働の在り方 —実習評価票「学びの履歴」を手掛かりに—　中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要　第 48 号　73-82
厚生労働省（2017）保育所保育指針
Ｄ・Ａ・ショーン（佐藤学　秋田喜代美訳）（2001）専門家の知恵—反省的実践家は行為しながら考える—　ゆみる出版
大谷　尚（2008）4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案 —着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き—　名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）54（2）27-44
上田敏丈（2013）保育者のいざこざ場面に対するかかわりに関する研究～発生の三層モデルに基づく保育行為スタイルに着目して～　乳幼児教育学研究　22　19-29
相良麻里　相良陽一郎（2017）教育実習に関する効果的な事前・事後教育の検討　千葉商大紀要 54（2）1-18